

---

# キャンディー

凜花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
キャンディー

【Nコード】  
N5715A

【作者名】  
凜花

【あらすじ】  
甘い、甘い、キャンディーは、すぐに溶けてなくなっちゃうから  
.....

困った時は、いつも、口の中でキャンディーを転がす。それが、私の小さい頃からの癖だ。

右の頬に含んで、舌でコロコロ、今度は左の頬へ。甘い香りが口の中に溶けて、私を包んで、心を落ち着かせてくれる。

ほら、ブドウ糖も入ってるし、頭の回転が良くなるんだよね  
っていうのは後から作った正論で、やっぱりただの”癖”に過ぎないんだけどね。

この癖は、もちろん、高校生になった今でも相変わらずだ。

「じゃあ次、問二を……佐藤、頼む」

数学の時間。「なんだか急に静まりかえったなあ」と思った瞬間、先生に当てられてしまった。

「あ、はい！」

驚いた勢いで返事をした私に先生は、「返事だけはいいなあ」と手についたチョークを払いながら苦笑い。どうやら授業を聞いていなかったことに気付いていて、私を当てたらしい。

周りの生徒たちは、自分が当てられなかったことにほっとしたようだ。また、いつものざわめきが波紋のように広がった。

「んーと、難しくてわかんないよお」

いつものように、首を傾げて甘えてみせる私。……が、「ちゃんと考えなさい」と即答され、やっぱりいつものように無駄な抵抗に終わってしまった。

（困ったなー）

とりあえず教科書を開いてみるものの、説明文の意味すら理解できない。数学は一番の苦手科目な上に、授業は毎回この調子なのだから当たり前だ。

んー。隣の席には数学の得意な香里がいるんだけど……きっと、答えを聞く前に先生に阻止されてしまっただろう。これも、いつものパターンなのだ。

仕方なく、私は教科書へ視線を戻した。

（……って何？あーわかんない）

困り果てた私は、ポケットからキャンディーを取り出すと、おもむろに包み紙を剥いで口の中に放り込んだ。

「こら！ お前はまた授業中に飴なんか……」

先生の呆れた声にうつすらと重なるように、「クスクス」って笑い声が揺れた。

いつものことながら、先生はこういう場面に弱いのだ。

そんな先生の仕草に満足しながら、私は口の中で、ゆつくりとキヤンディーを転がす。丸い宝石は、舌に押されてあっちへコロコロ、こっちへコロコロ。頭の中では、私の想いがクルクル回る。

先生、数学が出来ない私は、ダメですか？

こんな私じゃ……

好きになつてくれませんか？

いくらソレを転がしても、一向に答えは出ない。数学が出来ないことは、そんなに問題ではない。問題なのは、出来ない数学の先生が”あなた”だったこと。

そう、私の大好きなあなた      二十二歳、独身。      中沢先生。

……そんな想いを頭の中駆け巡らせているうちに、甘いキャンデ

イーはいつの間にか小さくなってしまった。もう、当てられてから十分は経っている。

「おい、佐藤……頼む。そろそろ答え、書きに来てくれ」

さすがに痺れを切らせた先生が、困り果てたように力なく叫んだ。

黒板には、『問二  $\cos^2 13\cos + 2 = ?$ 』の数式。  
もちろん、さっぱりわからない。

だって、数学の時間は、いつもあなたを見ているんだもの。目に入ってくるのは、黒板の記号の羅列なんかじゃなくて、あなたのことかほにかんだような仕草だし、耳に聞こえてくるのは、不可解な説明文なんかじゃなくて、あなたのハスキーな声音だけだもの。

けれど私は、席を立ててあなたの元へ行く。

今日は私、なんだか強気らしい。さつき、さくなったキャンディを、生まれて初めて噛み砕いたからかしら？

「おっ、佐藤。解けたか？」

やっと席をたった私に、先生は安堵の笑みを向けた。

「うん。でも……合ってるかな？」

先生の元へ辿り着くと、私は心配そうに呟いた。

「ん？ 答え、何になったんだ？」

「えつとねえ……ちよつと耳貸して？」

素直に「うん？」と、耳を傾ける先生。そんな無防備なあなたに、私は囁く。誰にも聞こえないように、慎重に。けれど、とびつきり甘い声で。

「え」

大人の落ち着いた雰囲気が一気に崩れて、あなたは小さな声を零す。

ほらね、顔、真っ赤にしちゃって。そんな可愛い顔した先生も、嫌いじゃないよ”。

まだ焦っている先生を尻目に、私はさらさらと黒板に答えを書いて　もちろん、デタラメだけど　最後にチラツと先生に悪戯っぽい笑みを向けて、席へ戻った。

「あ、えつと……ちよつとこれは違うな」

一瞬、戸惑っているような表情を見せた先生は、慌てて私が書いた答えの間違えを直しにかかった。

そんな先生を満足そうに眺めながら、私は新しいキャンディーを口に放り込んだ。そして、また、あなたを想う。

先生？まだ、「好き」なんて甘い言葉はおあずけよ。だって、そんな甘い言葉、キャンディーみたいにすぐに溶けてなくなっちゃい

そうだから。

でもね、先生？私、先生のこと



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5715a/>

---

キャンディー

2010年12月12日05時12分発行